

## 中央アジア・ウズベキスタンにおける遺構保存の現状と課題

古 庄 浩 明

### はじめに

中央アジアのウズベキスタン共和国は、1991年、ソビエト連邦の崩壊にともない独立した、まだ若い国である。地勢的には、大きくはフェルガナ盆地と砂漠地帯、山間部からなり、山間部に端を発する川沿いに、タシュケント・サマルカンド・ヒバ・ブハラなど、古くよりオアシス都市が栄えている（第1図）。

古代、アレキサンダー大王はこの地に至り、ソグディアナの平定に2年を要する苦戦を強いられた。また、この地の豪族の娘ロクサネを正式の妻とし、母とともにギリシャで悲劇的な最期を遂げたアレキサンダー4世が誕生している<sup>1)</sup>。

前139年に前漢の武帝は、匈奴攻撃のため張騫を西域の大月氏に派遣し、彼の13年に及ぶ旅は、シルクロードの発展に貢献したとされている。また、クシャーン朝の時代には仏教布教がなされ、バクトリアの地に多くの寺院が建築され、ガンダーラ様式の影響を受けた仏教美術を花開かせている。日本での信仰が深い大乘仏教は、ガンダーラの地で生まれたが、アフガニスタンをも含むバクトリアの地域で独自の発展をとげたと考えられており（バクトリアの中心地域はアフガニスタン側）、それが大きな仏像（大仏如来）とともにシルクロードを通して中国へ、そして奈良の大仏に見るよ



第1図 ウズベキスタン共和国

うに日本へと伝えられている<sup>2)</sup>。

さらに7世紀には、経典を求めて、玄奘がはるばるインドまでの旅をし、途中この地の様子を書き残している。彼が翻訳した『般若心経』は、今日多くの日本人にも親しまれている<sup>3)</sup>。

このように、この地はまさに東西文明のクロスロードとなった地域であり、この地域を本拠地としたイラン系のソグド人の活躍によって東西交易路シルクロードの中継地ともなった。サマルカンド・アフラシアーブの丘の壁画には、ソグドの王に朝貢する、東は中国・朝鮮半島の人々、西はヨーロッパからの使者が描かれており、そのことを物語っている。

中国で発明された絹製品や製紙法など東洋の文物は、この地を通して西洋へ伝えられ、逆に西洋文明や西アジアの文物、インドで生まれた仏教も東の中国へ、そして正倉院御物にみるように日本へと伝えられたのである。このように日本の古代を考えるうえでも、この地は視野に入れるべき重要な地域なのである。

近年ではシルクロード観光の「目玉」の一つとして人気の観光地ともなっており、世界中から多くの観光客が訪れ、そこに残る歴史的遺物や遺構・遺跡にふれて悠久の昔に思いをはせている。

しかし、そのシルクロードの「歴史の証言者」の一つである古代の遺跡のほとんどは「野ざらし」にされ、なんら保存や修復の手をさしのべられることなく荒れ果てていく一方である。このような状況の中で、遺跡保存に取り組んだ三つの遺跡の例を挙げて、この地域の遺跡保存の現状を説明する。

## 各遺跡の状況と保存方法

この地域の古代遺跡のほとんどは、日干し煉瓦で構築されており、地上にその姿を見せしている遺構も、発掘調査が行われた後の遺構も、保存のための処置は行われず、自然のまま風雨にさらされ、風化して元の土へと戻っていく運命にある。現在、日干し煉瓦で構築された遺跡の最も有効な保存方法は「土をかけて埋めてしまう」ことであろうが、今も地上に姿を見せしている遺構を埋めることは物理的に不可能であるし、発掘調査を終えた遺構を埋め戻すことは可能であるが、埋め戻した後は研究者を含め一般の人々も、その遺構を観察する機会を失ってしまい「遺跡の再検討」「遺跡の利用」を行うことを難しくしてしまう。

このような状況の中、近年、一部の遺跡で、日干し煉瓦の壁の保存処理が行われはじめている。ここでは日本にとって関わりの深い、ウズベキスタン南部のスルハンダリア州に位置する三つの遺跡を紹介し、その保存について検討して、日干し煉瓦で作られた遺構の保存の状況と課題を提示したい。

## カラ・テパ

スルハンダリア川がアムダリア川に流入する河口付近に都市テルメズがある。テルメズの語源は、アレキサンダー大王の遠征時にギリシャ人がつけた「暑い土地」という意味であったという説や、バクトリア王デメトリウスに由来するという説、サンスクリット語の川の向こうの町という意味と

いう説がある。テルメズは7世紀にこの地を通過した玄奘によって「咀密国」と記されており。早くからアムダリア川の渡河地点として、また、いわゆる「シルクロード」の要所として栄えてきた町である。紀元前四世紀には城郭を持つ都市が築かれており、また、中央アジア最古の仏教遺跡が数多く存在している<sup>4)</sup>。



第2図 カラ・テパ

カラ・テパはこのテルメズに存在する仏教建築群の一つである。この寺院の創建はクシャン朝カニシカ期であると考えられ、仏教の普及にクシャン朝の国家権力が大きく関与したことがうかがわれる。その後、ササン朝時代には廃墟となったが、6世紀後半から7世紀に仏教僧院として再興されたと考えられている。『大唐西域記』によると、テルメズには「伽藍は十数カ所、僧徒は千余人いる。多くの窣堵波および仏の尊像は神異なことが多く」と記されている。玄奘が目にしたのはこの時期の僧院であった<sup>5)</sup>。

この遺跡は北丘、西丘、南丘の三つの部分に分かれ、西丘と南丘で岩窟寺院が、北丘では僧院が確認されている。北丘では洞窟部分と、その前面にある中庭の複合的な構造、および13×12メートルの、日干しレンガ二段構造の基壇が確認され、この基壇の中から小さなストゥーパが検出されている。

カラ・テパの保存は、現在も発掘調査が続いていることもあり、この基壇部分に覆い屋をつける方法で行われている（第2図）。この方法は、後述するファイアズ・テパでも以前に用いられていた方法である。この方法では遺跡全体に覆い屋をかけることはできず、遺跡の一部だけの保存にとどまる。また、屋根だけなので、雨は防げても風を防ぐことは出来ず、風化を遅らせることはできるが、根本的な遺跡の保存とはなりえない。設置には、屋根を支える支柱の基礎を必要とするため、遺構の一部を破壊しなくてはならないという欠点もある。さらに、遺構の上に屋根をかけてしまうと景観上もよくない。調査中の崩壊を防ぐための一時的な処置としては一定の効果を期待できるが、発掘調査が終了した後、将来的には別の保存方法を講じる必要があるかもしれない。

## ファイアズ・テパ

ファイアズ・テパはカラ・テパの数百メートル北西にあり、寺院部分と僧院部分から成り立っている。寺院部分にあるストゥーパは、後代の改築時に、元のストゥーパを包み込んで、一回り大きなストゥーパとして再建したため、中にあった創建時のストゥーパの保存状況はきわめて良好であった。僧院部分は食堂・僧坊・講堂の三つの区画に分かれ、すべての部屋が中庭に向かって開く入り口を持つバクトリアスタイルを呈する。ファイアズ・テパの寺院は、当地方でもっとも古い仏教遺跡の一つとされ、クシャン朝の影響下に創建されたと考えられる。本遺跡からは多くの遺物や塑像・壁画などが発見されているが、特筆すべきものとしてガンダーラ美術の影響を受けた石灰岩



第3図 ファイアズ・テパ（修復前）



第4図 ファイアズ・テパ（修復後）



第5図 ファイアズ・テパ全景（修復後）

5図)。この修復は、ストウーパは焼き煉瓦のドームによって、遺構との間に空間を持たせて覆ってしまい、その他の壁も、石膏を混ぜた日干し煉瓦で修復し、壁は一定の高さで切りそろえ、上に日干し煉瓦につかう土を使って帽子状の覆いを乗せるというものである<sup>6)</sup>。

ファイアズ・テパの保存方法の長所は、長期にわたって風雨を防げることである。したがってメンテナンスが少なく済み、管理も簡単である。

短所としては、この保存方法は特別に調合した土を用意したり、煉瓦を焼いたりと比較的費用が高いことで、多くの遺跡にこの保存方法を行うことは出来ない。メンテナンスにも費用がかかる。焼き煉瓦の部分は取り壊しが困難で、新しい保存方法の開発などにより、一度原状に復する必要性が生じたときには多額の費用がかかってしまう。また、日干し煉瓦を使ったり帽子状の覆いを乗せたりしたことにより、遺跡の質感が変わってしまった感もある。

残念ながら2008年8月に訪れたときにはメンテナンスが行われなために修復部分が崩壊している壁



第6図 崩壊した修復部分

もみうけられた（第6図）。

ちなみに、遺跡のエントランスに日本風の四阿を造ってしまったことは、歴史的・景観的に大きな問題を残しており、早急の対策が求められる（第7図）。

### カンピル・テパ

カンピル・テパはテルメズからアムダリア川に沿って西へ30キロほど下流に位置している。遺跡の規模は東西約750m、南北約250mで、アムダリ

ア川の河岸段丘上に位置し、南側は今も風雨によって浸食され崩壊し続けている。遺跡はグレコバクトリアの時代アムダリア川の渡河点に建設された要塞から始まっており、城壁に守られた要塞都市として、居城と周辺の住居、祭礼に用いられた建物などが検出されている。ウズベキスタンの歴史学者ルトベラーゼ氏は、15世紀の著述家ハーフィズ・アブルーによって「《ブルタグイ》はテルメズに近いジェイフン河岸の土地である。そこにはテルメズよりもずっと以前に存在し、アレキサンドロス大王によって築かれたといわれている。《ブルタグイ》とはアレキサンドロス大王の時代に与えられたギリシャ名称であり客をもてなす家という意味であった。古代、ジェイフン河にかかる渡し場を取り仕切る大規模な船領主達が《ブルタグイ》にいた。」と記された渡河地点を、カンピル・テパに比定している<sup>7)</sup>。

本遺跡はカニシカ期に町全体が放棄され、その後、荒れ地のまま現在まで放置されている。

カンピル・テパは現在、ロシア隊・ウズベク隊・日本隊などが地区を分けて発掘調査しているが、それぞれに交流が少なく、発掘調査の方法も全く違って、各国が自分の思考にそって勝手に調査している。したがってお互いのコンセンサスは全くとれていない状況である。また、調査した後の遺構はそのまま放置し、保存のための措置をとっていない。調査のカウンターパートであるウズベク隊には資金がない状況で、発掘調査の一貫性を求めたり、保存を求めることもないという現状にある。これはカンピル・テパに限ったことではなく、ウズベクの調査全体にいえることである。

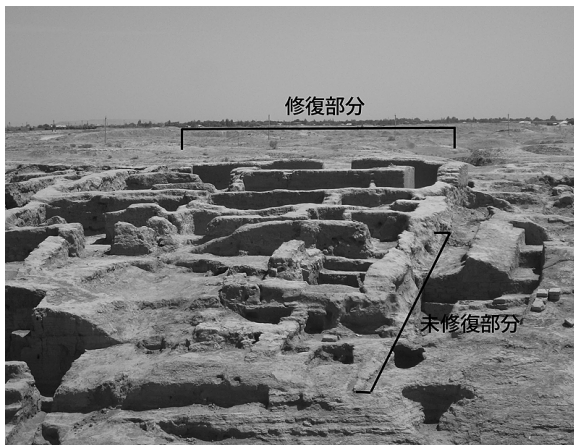
カンピル・テパの一部分で行われている保存方法は、今も地元で家を造る時に使われている日干し煉瓦を使って、元の壁を復元する方法である。この方法で2000年に、JAICAの資金の一部でゾロアスター教の神殿と考えられる建物の復元が試みられた。また、2007年にはアメリカ大使館の援助の一部、約14000ドルを使って、城壁の一部と町の一部が復元された（第8図）<sup>8)</sup>。この復元は当時のたたずまいを彷彿とさせるものであったが、JAICAの復元例では、せっかく修復してもメンテナンスを行う資金がないため、復元を完了した時点で放置された状態となり、一年ほどで屋根は落ち、壁は崩れ、荒れ果ててしまった（第9図）。アメリカ大使館の復元例では、2008年8月時点ではウズベク調査隊が最低限のメンテナンス費用を工面して、復元した壁の状態をなんとか維持し



第7図 日本風の四阿



第8図 カンピル・テパ（修復後）



第9図 修復したゾロアスター教神殿（2007年撮影）

ている。しかし、維持費を工面することが難しいらしく、今後も維持できるかは不明確な状況にあるとのことである。維持費としては、壊れた部分の修復費に年間40万円ほど、見回りなどの人の費用として月に2500円ほどかかっているとのことである。

カンピル・テパの保存方法は第一に資金が安いことである。この方法ならば、多くの遺跡を保存できる可能性がある。また今も村落の家屋は日干し煉瓦で作られており、この技術を応用して補修を行っているため、メンテナンスも簡単である。短所としては、すぐに崩壊してしまうことである。したがって常にメンテナンスが必要であり、もしメンテナンスを怠ると2000年にJAICAの資金の一部で行った修復のように、すぐに意味のないものになってしまう。逆に壊すことも簡単であるので、原状に復することが容易である。また、新しい日干し煉瓦を元の日干し煉瓦の上に乗せているため、時間がたつと補修のための日干し煉瓦と遺構の日干し煉瓦との区別が分かりづらくなる。

地元の技術を使い、地元でメンテナンスが容易なこと、また質感が変わらないことを考えると、日干し煉瓦を積む方法が現状では良いように思う。この方法で修復を行うとしたら、元の日干し煉瓦に新しいものを積み重ねる方法も一つの方法であるが、新しい日干し煉瓦で遺構を内側にサンドイッチにして元々の日干し煉瓦を保護しながら壁の外観を整えていく方法がオリジナルの日干し煉瓦を痛めないのが良いと思う。新しい日干し煉瓦と遺構の間にはシートや砂など緩衝材を充填しておく必要がある。

オリジナルの日干し煉瓦に新しく日干し煉瓦を積み重ねる場合には、オリジナルと新しい日干し煉瓦の違いを明確にする必要がある。オリジナル部分と新しい日干し煉瓦の境目に砂やシートなどの緩衝材を入れておき、新しい日干し煉瓦にはそれと分かるマークなどをつけておくことが必要であろう。

ストゥーパなどの大型の構造物の保存は、間にシートや砂などの緩衝材をいれ、その上で遺構に

密着させて日干し煉瓦などを積む方法などが考えられるのではないか。

以上、三つの遺跡の保存例をあげ、その長所と短所を述べた。どの方法にしてもメンテナンスは必要であり、修復後の維持管理が大きな課題である。どの方法を用いても、その後の維持管理は行われなければ次第に荒れ果てて崩壊していくことは、JAICAの資金を使ったカンピル・テパの修復例からも明らかである。しかしながら、現状では外国からの援助で維持管理費を出し続けることは不可能である。したがってウズベキスタンの人々が自ら維持管理できるシステムを考え出さなければならない状況にある。

### 修復保存・維持管理のためのシステム

どのような修復が行われようとも、その後の維持管理が行われなければ全ては意味のないものになってしまう。そこで、ここでは遺跡の修復保存・維持管理を行うシステムの素案を提示してみたい。ここで提示するものは素案であり、あくまで「たたき台」として提示するものであり、決して「この方法しかない」というものではない。したがって各遺跡の事情に合わせてフレキシブルに対応することが必要だと考える。しかし、遺跡保存活動の基本的かつ全体的な方向性が示されていないこの地域においては、まず「素案」を提示することによって活動全体の方向性を考える一つの契機としたい。

日本や諸外国・UNESCOが援助し、修復保存・維持管理などの技術移転おこない、観光資源として活用して遺跡の保存に成功している例としてカンボジアのアンコールワットがある<sup>9)</sup>。アンコールワットでは「遺跡の修復」「カンボジア人専門家の養成」「遺跡・村落・森林の共生」が掲げられ実践されてきた。アンコールワットという世界的に有名な遺跡の保存修復活動を通じて、カンボジア人専門家を育成し、カンボジア人の手で遺跡の修復保護を行えるようにするこのプロジェクトは、長い年月継続されている結果、大きな成果を上げている。また、アンコールワットを中心とするバイヨン寺院の保存修復活動も行われ「バイヨン憲章」という中心理念も発表されている<sup>10)</sup>。中央アジアでもこのように世界的に有名な歴史的価値のある遺跡で長期的な保存修復・人材育成・教育普及プロジェクトを行うことが重要である。その試みの一つがファイアズ・テパの修復であったが、残念ながら修復の終了とともに放置されているのが現状である。その原因は修復の理念や技術が十分に地元に浸透しなかったこと、専門家の育成が継続しなかったこと、資金調達が地元で行えず、外国の援助による修復が終了した後に維持管理の資金を用意できなかったこと、などの問題点があった。このような反省点を踏まえ、カンボジアの例にならって、今一度、遺跡保護と人材育成を目的とした国際的プロジェクトを始めることが必要であろうと考える。また、現在行われている各国の発掘調査も、カンピル・テパの調査の例に見るように、何の理念もなく各国の思惑で行われている状況を改め、ベニス憲章やバイヨン憲章をもとに遺跡の発掘調査・修復保存・維持管理・人材育成・教育普及をも含めた国際的な基本理念やガイドラインを設けるべきだと考える<sup>11)</sup>。

それと同時に、すべての遺跡を国際的プロジェクトの元で保護することは不可能なので、地元の事情に即した低予算で外国の援助に頼らない修復保存・維持管理システムを考える必要もあろう。多くの遺跡はこちらのシステムを使い、地元の力で維持管理していくことが重要だと考える。この



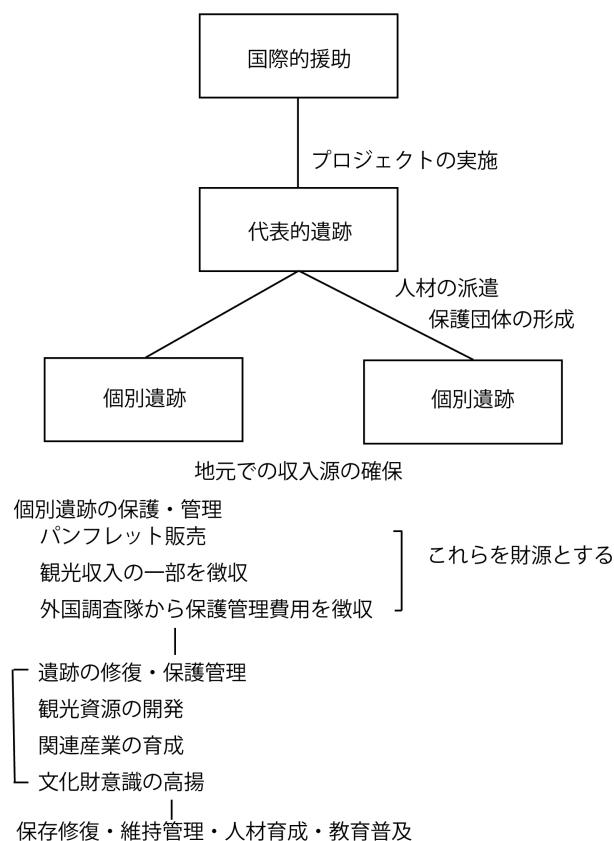
第10図 カンピル・テパを訪れる観光客

システムを外国からの援助を受けて育成された人材に任せられるようにすればどうか。

低予算で外国の援助に頼らないシステムにとって重要なのは

- 1, 保存・維持・管理するための資金を地元で調達できるようにする。
- 2, 地元の人々によって保存・維持・管理できるシステムを構築する。
- 3, 地元の人々の文化財保護に対する意識を高める。

発掘調査・修復・保存・管理の基本理念・ガイドラインの形成  
発掘調査・修復保存・維持管理・人材育成・教育普及



第11図 遺跡の保存管理の方法

ことである。

もっとも必要なことは資金の調達である。

私が調査に参加しているカンピル・テパには、調査期間中、海外の観光客が見学に訪れている（第10図）。私たちは見学者に対し説明をおこなうが、それも含め見学自体は無料で行われている。したがって見学者が来ても旅行社が報酬を得るばかりで、その恩恵は地元へ還元されていない。そこで地元にお金が落ちるようにするために、遺跡のパンフレットを作り、これを販売してはどうかと思う。また、旅行業者からその収入の一部を徴収することも考えられよう。さらに、諸外国の発掘調査団から調査費の一部を保存活動資金として徴収することも一つの手段と考えられる。これらの収入で遺跡の監視員や説明員を雇い、維持管理や修復まで行えるようにすればよい。さらに地域の人々の啓蒙や産業の振興にも



力を尽くすことが必要である。「パンフレットの売り上げでそんなことが出来るか？」と疑問を持たれるだろうが、私たちが地元で雇っている発掘労働者の一日の給料が2～3ドルほどであることを考えれば、観光客に1～2ドルほどでパンフレットを販売すれば運営していける可能性は十分にある。遺跡の保存・維持・管理が現金収入につながることが分かれば、地元の文化財保護に対する意識も高まるはずである。遺跡を保護し地元の観光資源として活用することによって、現金収入の確保と遺跡保護を両立できるのではなかろうか。問題なのは「だれがその運営をするか？」である。やはり NPO の団体を作って運営をまかせることが良いと思われる。この NPO 団体を指導監督する人材を国際的なプロジェクトの方で育成していくことも大切であろう。しかし、まずはウズベク側の研究者によって運営されることがもっとも現実的な方法である（第11図）。

ここで、もっとも恐れなくてはならないのは、盗掘による遺跡の破壊が活発化することと、保存運動に伴ってその利権をむさぼる人々が台頭してくることである。盗掘者に対する対策は監視員の数を増やすことなどが考えられるが、利権をむさぼる人々に対しては、遺跡保存だけの問題ではなく、社会全体の成熟が必要なので、別途考えなくてはならない課題である。

## おわりに

中央アジアは、誰もが知るように、東西文化のまさにクロスロードである。しかし、その歴史を語る古代の建築物は、ほとんど日干し煉瓦で造られており、その保存処置は、現状ではほとんど行われておらず「野ざらし状態」で、崩壊して土に帰るのをただ待つばかりなのである。本論に取り上げた三遺跡は其中でも遺跡の保存を試みた数少ない例である。その意味では先進的な試みを行った遺跡といえる。当該地域の国々は、独立してまもなく、経済的に遺跡の保存にまで資金を使う余裕がある国ではない。したがってより低予算で保存を行える方法を試行することが望まれる。しかし、もっとも重要なことは、国民が遺跡の重要性を認識して、自ら遺跡の修復維持管理を行おうとすることである。そのためには現在行われているように、盗掘した遺物を骨董品として売りに出すよりも、遺跡を保存して維持管理し、観光資源として活用することによって収入をあげることが推奨すべきである。また、現在中央アジアで調査を行っている団体は、それぞれ思考でばらばらに調査しており、統一した理念が欠如している。この地域で調査する団体に共通の、また国際的に共通の文化遺産に対する理念作りが急がれるところである。

## 註

- 1) 森谷公俊 2007 「アレクサンドロスの征服と神話」『興亡の世界史』01講談社
- 2) 稲葉 稔 2004 「アーリア時代の中央アジアの文化—諸文化の伝播と融合」『放送大学教材 中央アジアの歴史・社会・文化』放送大学教育振興会
- 3) 註2に同じ
- 4) A. T. Iriskulov. TERMEZ—AN ANCIENT AND MODERN CITY AT AN IMPORTANT CROSSROADS. Sharq
- 5) 玄奘著 水谷真成訳注 1999 『大唐西域記1』東洋文庫653 平凡社

- 6) Thierry Joffroy and Mahmoud Bendakir 2006. Fayaz tepa. CRA Terre-ENSAG/UNESCO
- 7) エドゥワルド・ルトヴェラーゼ 2005 「カンピル・テパ＝パンダヘイオン＝アムダリヤにある遺跡」『偉大なるシルクロードの遺産』偉大なるシルクロードの遺産展図録 (株)キューレターズ
- 8) The ambassador's fund for cultural preservation 2005 and 2006
- 9) 石澤良昭 1998 「アンコール遺跡の調査研究と保存活動の歴史」上智大学アンコール遺跡調査団
- 10) 日本国政府アンコール遺跡救済チーム 2005 「バイヨン憲章」<http://www.angkor-jsa.org/>
- 11) 日本 ICOMOS 国内委員会 1964 「ベニス憲章」<http://www.japan-icomos.org/documents.html>

#### 参考文献

- 加藤九祚 1997 「中央アジア北部の仏教遺跡の研究」『シルクロード学研究』VOL.4 シルクロード学研究センター
- 加藤九祚他 1991 『南ウズベキスタンの遺宝—中央アジア・シルクロード—』創価大学出版会
- 加藤九祚他 2005 『偉大なるシルクロードの遺産』偉大なるシルクロードの遺産展図録 (株)キューレターズ